

本日お読み頂いたルカによる福音書 15 章には、3 つのたとえ話が並列する恰好で書き記されています。「見失った羊」のたとえ、「無くした銀貨」のたとえ、そして「放蕩息子」のたとえの 3 つです。はじめの二つは短く、最後の 3 番目は長い物語になっています。しかし、短・長にかかわらず、これら 3 つのたとえ話には一貫した共通のテーマ（主題）があります。それは、神の目から見て失われていた者が悔い改めた結果、神に見出されるものとなったということ、さらに、その事、すなわち失われた魂が神の手の内に戻ってくるという出来事を一緒に喜ぼうではないかという、神からの呼びかけがなされているという事です。確認してみます。6 節で羊飼いは言います。「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」9 節で、銀貨を失くした女は言います「失くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください」そして、32 節で放蕩息子の父親は言います「だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」3 つとも同じです。神さまから遠く離れていた者が、見出されたときの喜びは大きい。だから一緒に喜ぼうというのです。

これらのたとえ話は、イエスのまわりに徴税人や罪人たちが、話を聞こうと集まってきたとき、語られました。イエスがこれらの人々と一緒にいるのを見て、ファリサイ派の人々や律法学者たちが、非難の言葉を投げかけた場面で、です「この人は、罪人たちを迎えて食事まで一緒にしている」彼ら、徴税人や罪人と呼ばれる人たちは、「地の民」と呼ばれました。大地にへばりつくような姿で生きている卑しい民、という意味です。ファリサイ派の人たちの規約には次のような申し合わせがあったと言います。「地の民にお金をあずけてはならない。彼らから一切の証言を求めてはならない。彼らに、孤児の保護をたのんではならず、旅の道づれになってもいけない」このように、ファリサイ人たちからまともな人間としてしての扱いを受けていなかった徴税人や罪人たちと、主イエスは食事を共にしました。イエスはこれらの罪人の側に身を置き、彼らの友となられたのです。「神はどこにいるのか」という問いがしばしば投げかけられます。これに対して、聖書ははっきりと答えます「神は罪人たちとともにおられる。神はいと小さき者とともにおられる」と。

わたしは大学 2 年のときに（5 月でしたが）はじめて教会の門をたたき、初めて礼拝に出席したその日に牧師の招きに応じて前に出て、イエス様を信じる者となることを表しました。おそらく、礼拝の出席していたほかの多くの人の目には「この人、本当にわかっているのだろうか？」と訝しく思われたことと思います。現に、地区分級の教師をつとめておられた栗山さんという執事が、あとで「教会に来たその日に、木村君が決心して前に出た時は、本当にびっくりした」と話してくれました。しかし、わたしのなかにはぼんやりとした確信があったのです。「聖書が語ろうとしている世界には、これまで自分が二十歳になるまでに教わってきた価値観やものの見方とは異なる価値観、違った真理があるはずだ」と。

マタイ福音書の 20 章に、「ぶどう園の労働者のたとえ」という見出しの付された物語があります。「天の国はつぎのようにたとえられる」という書き出しで始まるこの物語で、ブドウ園の主人は朝夜明けと同時に çık かけて労働者たちと一日 1 デナリの約束で彼らを雇い、ぶどうの刈入れの仕事をさせます。ところが、その後 9 時、12 時、午後 3 時、そして夕方 5 時にもでかけて行って、仕事にあぶれたほかの労働者たちを、ふさわしい賃金を払うからという約束をしてブドウ園に送り込むのです。そして、夕方になり、賃金を払う段になって、夕方 5 時から働いた人たちを先頭に、労働時間の短いほうから順に並ばせて、賃金をはらった。何と 1 デナリです。こうして、最後に朝一番からずっと働いた人の番になった。しかし、もっと多く貰えるだろうと思ったのに、彼らが貰った賃金もやはり 1 デナリであった、というそんな物語です。この話を、経済学部に進学する予定の大学の友人に「すごいんだよ、聖書は。この話では、みんな同じ賃金をもらえたというんだ」と紹介したら、即座に「それはおかしいよ」！と激しく反論してきました。当然だと思います。経済学的な見方をすれば、考えられないことなのです。1 時間しか働かなかった人が、丸一日 12 時間働いた人と同じ賃金をもらえるという話は、この世の秤からすれば無茶苦茶な話であり、不公平な話です。しかし、聖書は、「神の国とはこのようなものである」というのです。ちなみに、神学校時代に新約学の授業で、このマタイ福音書 20 章の物語が、ふたたび話題に上りました。先生はこう言われました。聖書の神は、無きに等しいものをご自身の救いの中へと導かれる神である。夕方 5 時から雇われた人は、1 デナリの賃金

をもらう資格のない者である。しかし、もし私たちが、同じように仕事にあぶれ、この5時から雇われた労働者だったらどうであろうか。ただ感謝してこの1デナリを神の憐れみを感じつつ受け取るに違いない。あなたは、どちらに立っているか。「わたしは救われる資格がある」と胸を張って、自分を誇る朝6時から働いた人の立場か、それとも「わたしには受け取る資格がない」ことを認め、頂いた神の恵みを感謝して受け取る夕方5時からの人々の立場か。それが、このたとえ話では問題になっているのですよと。

そこで本日の聖書、見失われた羊の物語に入ってゆきます。「あなたがたのうちのある人が、百匹の羊を持っていて、その中の一匹を見失ったとすれば」という仮定の話です。イスラエルの羊飼いには、一つのたいへん危険で困難な仕事がありました。それは、群れのすべての羊を最後まで看取するという仕事でした。もし、群れの中の1匹の羊が行方不明になり、放牧中に命を落としてしまったときは、羊飼いはその羊毛を刈り取って持ち帰り、どうして死んだのかを持ち主に説明しなければなりませんでした。羊は、多くの場合、個人の所有物というよりも村全体の共有物で、いわば村全体の財産でした。したがって、一つの群れには2~3人の羊飼いが常時張りついて、群れを管理することを託されていました。しかし、羊はとても視力が弱く、足も遅くて、とても俊敏な動物とはいえません。広大な緑の牧場や平地がほとんどないパレスチナでは、羊飼いは羊たちの監視で、目を光らせていなければなりませんでした。多く場合、羊飼いたちは群れをつれて、定刻通りに村に帰ってきましたが、ときには、迷子の羊を探して、羊飼いがまだ山にいるというアクシデントが発生する日もありました。そんなときは、村全体で羊飼いが帰ってくる方向に目を凝らし、何時間も待ちました。やがて遠くの方から、迷子の羊を肩に担いで帰ってくる姿を認めます。そのときには、村中から、喜びと賞賛がまじった歓声が湧きおこったと言います。羊飼いは家に帰り、友達や近所の人を呼び集めて「見失った羊を見つけました。一緒に喜んでください」そう言って、宴会を始めるというのです。主イエスが語られた本日のたとえ話で、迷子の羊が見つかった時の喜びには、こうした背景がありました。そうして、主イエスは言われます。あなたがたと神との関係もこれと同じだ。神さまもまた、失われた罪人が見出される時、ちょうど羊飼いが迷子の羊を連れ帰ったときと同じような喜びの声、歓声をあげられるのだというのです。ここには、神さまは一匹の迷う羊をどこまでも追い求めたもうという信仰があります。最後の7節で、主イエスの言葉が語られます。「このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」主イエスは、このたとえをファリサイ人や律法学者たちに向けて語られました。彼らは、この主の言葉をどのように聞いたでしょうか。自分たちは九十九人の正しい人であって、イエスは自分たちとは別種の徴税人や罪人の一人が悔い改めたほうが天国での喜びが大きいと言われたのだ、と理解したかもしれません。その可能性が大いにあります。しかし、考えてみてください。そもそも悔い改める必要のない人がこの世界にいるのでしょうか。主イエスはここで、あなたたちファリサイ人は悔い改めなくてもよいが、わたしの周りにいるこれらの罪人は悔い改める必要があり、その悔い改めがより大切なのだ、と言われているのではありません。あなたがた自身が神の前に失われた存在ではないか。あなたがたもこの見失われた一匹の羊と同様、神への立ち返り、悔い改めが必要だと言っておられるのです。

長く信仰生活を続けてくると、自分がいつのまにか悔い改める必要のない九十九匹の羊のほうに属していると思えてくることがあります。このあとに登場する放蕩息子のたとえで言うならば、放蕩に身を持ち崩してボロボロになって帰ってきた弟を迎える兄の立場に立ってしまうのです。父親は、この弟を、すべてを赦して受け入れました。豚の世話までして、ユダヤ人としての誇りをも失い、どん底を経験したこの弟を何の咎めだてもせず、最上級のしかたでもう一度わが子として迎えたのです。しかし、兄はそれが許せなかった。それは、自分と比較してこの弟が余りにもいい思いをし過ぎていると思ったからです。自分はこれまで一所懸命、苦勞して父に仕えてきたのに、この弟はやりたい放題、したい放題で、その報いとして現在の落ちぶれた自分があるのに、父親はそれを無条件で赦し、罪を帳消しにしたという。そのことが、許せないのです。まさに業によって人を裁き、評価しようとするファリサイ主義の本質がここに現れています。しかし、イエスは言われる。一人の魂の救いを喜ぼう。その人の過去の過ち、過去の罪を責め立てることなく、むしろその人の未来の生き方、未来の立ち直りに賭けよう。

神さまは資格のある者を愛され、ご自身の救いに入れられるのではありません。そうではなくて、資格のない者を救いへと招かれるのです。この私もまた、大切な一つの魂として神さまから見つめられ、見守られています。99匹を野原に残して、迷った一匹を見つかるまで探し求める羊飼いと、私たちの主であり救い主である、イエスさまなのです。

お祈りいたします。